

## 公益社団法人日本獣医学会の課題と展望

中山裕之<sup>†</sup> (公益社団法人日本獣医学会代表理事・東京大学大学院農学生命科学研究科教授)



本年3月28日に開催された公益社団法人日本獣医学会総会で新しい理事・監事が選任され、直後の新理事会で私が代表理事(理事長)に選出された。皆様方のご支援、ご鞭撻を心よりお願いする次第である。

日本獣医学会と日本獣医師会はわが国の獣医学術活動において車の両輪のような関係を築いてきている。近年では学術集会の共同開催、獣医師会獣医学術学会年次大会でのシンポジウムの共同開催などを通じて、獣医学の最新的话题を両会の会員ばかりでなく社会へも向けて発信してきた。今後も獣医学分野はもとより、獣医学教育改革、動物看護師共通資格創設などの案件においても互いに協力して推進していくことが重要であると心得ている。この度日本獣医師会雑誌編集委員会より、日本獣医学会の現在の課題、今後の展望などについて述べるよう紙面をいただいた。若干の私見が混じることになるが、考えていることを述べてみたい。

日本獣医師会は本年4月1日に公益社団法人に移行されたが、日本獣医学会も2月1日をもって公益社団法人に移行した。公益法人化は前執行部(理事会)の最大の案件であり、これが円滑に完遂できたことは西原前理事長の大きな功績と考えている。現理事会がまず取り組むべきことは、コンプライアンスに則った、公益法人にふさわしい事業運営システムの確立と、社会への還元を常に念頭に置いた事業の実施であると思っている。まずは、学会の運営方針となる理念及び倫理綱領の制定が必要であろう。加えて、定款あるいは各種規約の若干の変更が必要になるかもしれない。

2004年、マンハッタン原則により「One world, one health」の理念が提唱された。その後国際獣疫事務局(OIE)もこの理念を取り上げ、「人、動物、環境の健康」は今世紀の全世界において獣医学が果たすべき共通の目標となった。日本獣医学会もこの目標に向かって鋭意努力し、わが国ばかりでなく国際社会への貢献を目指して行く所存である。この目標を達成するために、日本獣医学会が急ぎ取り組むべき課題として、(1) 獣医学教育充実の支援、(2) 獣医学の国際化促進、及び(3) 男

女共同参画の促進を挙げたい。

### (1) 獣医学教育充実の支援

獣医学教育の充実、とくに学部教育改革については、すでに様々な事業が始まり、これまでは遠い将来像でしかなかった到達点が現実のものになってきた。現在、コア・カリキュラムが作成され、参加型実習と共用試験の実施、評価システムの構築へ向けた準備が進んでいる。また、懸案であった国立大学における獣医学学部教育の規模拡大についても、今年度、山口大学と鹿児島大学が共同獣医学部を、北海道大学と帯広畜産大学が共同獣医学課程を、岩手大学と東京農工大学が共同獣医学科を設置し、さらに岐阜大学と鳥取大学も来年4月の共同獣医学科設置の準備を行っている。1984年の獣医学学部教育6年制への移行以来、実に28年の歳月を経て獣医学教育の実質的な改革がようやく動き始めた実感している。日本獣医学会は2009年に獣医学教育改革委員会(委員長:北大・橋本善春教授)を設置し、全国大学獣医学関係代表者協議会と連携して学部教育の改革を推進してきた。春と秋の学術集会時には獣医学教育改革シンポジウムを開催している。このシンポジウムでは獣医学ばかりでなく医学、歯学、薬学等の専門家を国内外から招き、それぞれの分野における学部教育改革の経験について講演いただいている。獣医学学部教育改革については、文部科学省、農林水産省、日本獣医師会などでも多面的な検討が行われている。日本獣医学会の代表としてこれらの会議に出席し、様々な場面での調整を行うことも私に課せられた使命であると考えている。さらに今年度からは教育改革担当の理事を設け、諸事に対応して行く予定である。

### (2) 獣医学の国際化促進

高等教育の国際化(グローバル化)は10年ほど前から常に声高に叫ばれているが、海外への留学生数の減少など大学生の内向き思考が資料として明らかにされ、加えて東京大学が秋入学の検討を始めたため、昨年頃よりとくに声が大きくなってきたと思われる。文部科学省も様々なインセンティブプログラムを用意して、学部及び大学院教育のグローバル化を推進している。一方で、研究の国際化は以前に比べてだいぶ推進されてはいるが、まだまだ欧米並みとはいかないようである。頭脳流出を

<sup>†</sup> 連絡責任者: 中山裕之(東京大学大学院農学生命科学研究科獣医病理学研究室)

〒113-8657 文京区弥生1-1-1 ☎03-5841-5400 FAX 03-5841-8185 E-mail: anakaya@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

防ぐため国内でのポストポストが増えたことは評価できるが、わざわざ海外へ行かなくても研究が続けられるので、世界へ挑戦するという気概を持った若手研究者は減少しているのではなからうか。教育と研究、いずれでもバランスのとれたグローバル化が求められている。

日本獣医師会はアジア獣医師会連合（FAVA）及び世界獣医学協会（WVA）に加盟し、活発な国際交流を行っている。これに対し、日本獣医学会における国際交流は、これまで会員個別あるいは分科会レベルでの国際交流であって、獣医学会本体は国際的な事業は行ってこなかった。これは海外では各国の「獣医師会」が獣医学術をも担当し、「獣医学会」という学術普及のみを目的とする団体が存在しないことによると思われる。しかしながら、日本獣医学会も日本獣医師会の学会組織と協力して海外との学術交流にあたれば、より強力な獣医学国際交流体制が確立される。海外の獣医学関連研究者を招待してのシンポジウム開催、若手の獣医師、獣医学研究者の海外学会への派遣などの事業を獣医師会と共同で行うことを検討していきたい。

### **(3) 男女共同参画の促進**

日本獣医学会は2008年に男女共同参画学協会連絡会に正会員として加盟した。この会は、日本学術会議での「女性科学者の環境改善の具体的措置について」（要望）及び「日本学術会議における男女共同参画の推進につい

て」（声明）の採択を受けて、2002年7月19日に発足した。同連絡会は科学技術分野において、女性と男性がともに個性と能力を発揮できる環境作りとネットワーク作りを目標に様々な活動を行っている。現在、47の学協会が正会員、24学協会がオブザーバー会員である。日本獣医学会も同連絡会のメンバーとして、会の活動と運営に協力し、加えて獣医学会内でも担当理事を設けて男女共同参画を積極的に取り入れた活動を奨励している。

具体的には、学術集会時の保育室運営がある。2000年に獣医学会会員有志が「保育室利用者の会」を発足し、学術集会時に自主的な保育室を開いた。当初、日本獣医学会は司宰機関への保育会場斡旋依頼と経費支援のみを行っていたが、2008年に保育室を学会本体の事業とすることを決定し、2009年秋の第148回学術集会（鳥取大学）より運営を開始した。毎回数人から十数人の利用者がある。また、来年3月に東京大学を司宰機関として開催される第155回学術集会では、社会で活躍されている女性獣医師の方々にスポットライトを当てた企画が予定されている。こうした対応を通じて本事業のより一層の促進を図っていきたい。

以上、日本獣医学会が今後向かって行くべき方向について簡単に述べた。日本獣医師会会員各位のご理解とご協力を切にお願いする次第である。